



MINATO-TOKYO

# みなとユネスコ 会報

Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS &amp; CALENDAR

ISSUED BY / MINATO UNESCO ASSN. 16-3, SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004 / HIROSHI NAGANO PRES.  
 発行所 / 港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人 / 永野博  
 Mail: info@minatounesco.jp http://minato-unesco.jp

2018年9月1日発行 第153号

|        |                  |     |            |
|--------|------------------|-----|------------|
| P1     | 巻頭言：八月に思ったこと     | P12 | 新入会員を囲む会   |
| P2-6   | MUA シンポ「危機のユネスコ」 | P13 | ルーマニア大使館訪問 |
| P7     | MUA サロン          | P14 | 坐禅体験講座     |
| P8-9   | ミンダナオ子ども図書館      | P15 | 第74回日ユ全国大会 |
| P10-11 | ゆかた着付け体験教室       | P16 | 事務局便り/編集後記 |

## 八月に思ったこと

港ユネスコ協会 常任理事 松崎加寿子



毎夏8月には第二次世界大戦関連のテレビ番組が多いのですが、12日NHK BS放送の『悪魔の兵器はこうして誕生したー原爆科学者たちの心の闇』を見ていたところ、原爆生成のマンハッタン計画に従事した科学者たちの何枚かの集合写真のなかにヘンペルマン先生（Louis H. Hempelmann 1914～1993）を見つけました。ずんぐりとした物理や化学の学者の間で、すらっとしたいでたちの彼はアメリカの好青年の風貌です。彼は亡父のアメリカ時代のボスでした。

亡父は1949年に医学部を卒業、基礎医学の道を選び生化学教室にいました。そして1957年から59年までアメリカの原子力委員会からの招聘（詳しいことは不明です）で、ニューヨーク州にあるロチェスター大学の当時放射線科を主宰されていたヘンペルマン先生のところに行ったわけですね。家族を連れての留学であり、1ドル360円で外貨持ち出しもかなり制限されていた時代にどうやってやりくりしたのか、当時幼かった私には知る由もありません。

あの頃のロチェスターはKODAK社と共に栄えていた企業城下町であり、庭にはリスが来たり冬には大雪となり、こどもには楽しいところでした。戦後十数年しかたっていないのですが、JAPと言われることも殆どなかったのはアメリカ社会に寛容さや戦勝国の余裕があったせいかなと思います。さてヘンペルマン先生（奥様はあのピューリッツァー賞のピューリッツァー族の出で、日本の『蟹工船』なども読破されるインテリと母から聞きました）ですが、マンハッタン計画に何らかの関わりがあると聞いたのはずーっと後のことです。父がそのことを知っていて留学したのかどうかいまは不明ですが、多くの優秀な学者たちがほんとに悪魔の兵器とっていい原爆の開発に携わりました。

ヘンペルマン先生がどのような経緯で、どんな気持ちで原爆開発に関わったのか知りたいと思いました。昔なら図書館通いですが、今ではインターネットを利用できるので、Hempelmannで検索してみました。なんとAtomic Heritage Foundationという団体のサイトがあり、彼がカリフォルニア州バークレイでサイクロトロン医学応用の研究をしていた時期に、マンハッタン計画に関わっていた物理学者と知り合ったことやロスアラモスでの彼の仕事（人体への放射線の影響研究）のことが判り、晩年のoral historyインタビューに応じた彼の肉声まで聞くことができました。彼は医者ではありますがマンハッタン計画に関わった他の多くの学者と同様に、原爆の持つ意味を残念ながら深くは考察してなかったのかなと思いました。今日の科学技術の発達についても、その是非はユネスコ精神をもって接していきたいところですね。

## 2018 年度港ユネスコ協会シンポジウム 危機のユネスコ世界遺産

日時：2018 年 6 月 8 日（金曜日）午後 6 時半～8 時半  
場所：港区立生涯学習センター 305 号室

今回のシンポジウムは港ユネスコ協会理事であり、何度も当協会で講演をしていただいている東郷和彦氏から、五十嵐敬喜氏が「世界遺産 ユネスコ精神」という著書を出版されたので、当協会に取り上げてはどうか、というご提案を頂いたことから企画されました。著者の五十嵐敬喜氏に基調講演をお願いしたところご快諾頂けたので、本書の編著者である佐藤弘弥氏と東郷氏にパネリストをお引き受け頂いて、本シンポジウムを開催する運びとなりました。登壇者 3 名のご略歴は以下のとおりです。

基調講演者：五十嵐敬喜氏

法政大学名誉教授、日本景観学会前会長、弁護士、元内閣官房参与。「美しい都市」をキーワードに住民本位の都市計画の在り方を提唱。平泉、熊野古道、長崎隠れキリシタンなど世界遺産登録にも尽力。

パネリスト：東郷和彦氏

京都産業大学 世界問題研究所長。港ユネスコ協会理事。元在オランダ全権大使。

パネリスト：佐藤弘弥氏

フォトジャーナリスト、日本文化研究家。「平泉を世界遺産にする会」の運動を展開。

モデレータ：永野 博 港ユネスコ協会会長

以下に 3 名の講演・ご意見・討議および参加者との質疑応答の内容の要約を記します：

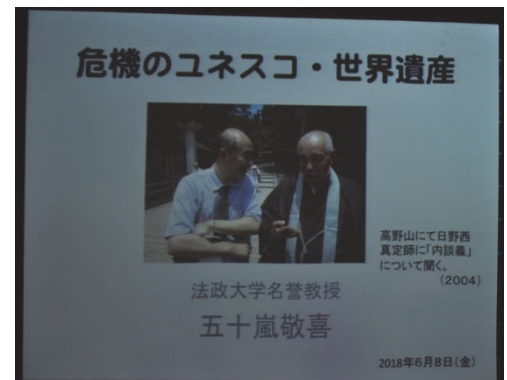
**五十嵐敬喜氏：**私のキャリアの最初は弁護士だが、大学卒業当時は全学ストライキなどあり、混沌としていた。司法試験に合格して、弁護士として働き始めた頃、小学校の隣にボーリング場が出来るといふ問題について近隣住民から相談を受け、初めて建築基準法を勉強した。日本の建築基準法には「原則、建築は自由」という大きな欠点があると分かり、これを変えないと良い街は作れないと理解した。1970年代に入ると、いわゆる高度経済成長の波に乗り、東京にもどんどんマンションが増えるようになり、ボーリング場問題に引き続き、建築公害対策市民連合というのを作り日照権問題に取り組んだが、爆発的に事件が増え、個別処理では対応できなくなってきた。爆発の根底に「建築自由の原則」があり、これを擁護する建築基準法や、この問題に疑問を抱かない「建築家」、さらには「建築の本質とは何だろうか」といような原則的な問題を考えるようになった。長い時間をかけて市民の基金をもとに建築を作り続けるスペイン、バルセロナの「ガウディ聖教会」を見に行ったり、友人の学校作りを手伝う中で米国バークレイ大学のクリストファー・アレクサンダー氏を招いた。彼は日本でも「パターンランゲージ」を提



唱した建築家として知られ、実際に埼玉県入間市で東野高等学校を設計・建築した。

しかし当時は年間 100 万棟も建物が建つ時代。全国に開発の波が押し寄せ、神奈川県の実鶴町という小さな町にも数十棟のマンションが計画された。困った町長は都市計画学会にこの問題の対処方法を相談し、都市計画学会は、この問題は法律と建築・都市計画の双方が分かっている人でないと対処出来ない、として私を紹介し、それが私と実鶴町の出会いとなった。様々な討議の結果、乱開発を阻止し、美しい町を作るための「美の条例」を作った。この中の「建築の基準」は、その後、日本だけでなく世界的にも紹介されるようになったが、それでも真実、何をもって美しいというのか？という疑問は解けなかった。迷いの最中、「世界遺産」というものがあるのを知り、これは「美しい」というものの「客観的基準」になると思い、調べてみたら当時実は世界遺産に登録されたものの、7~8 割は信仰に関するものであるということが解った。信仰が分からなければ美の本質はわからない。そこで大学の休暇を利用して、当時世界遺産に登録されたばかりの高野山に行き、高野山大学の学生として 1 年間過ごした。宗教民俗学の大家であり、かつ当時高野山奥の院で「唯那」職を務めていた日野西真定僧侶からはとりわけ真言密教の「秘密」にかかわる貴重な教えを頂いた。その意味で収穫が大きかったのであるが、同時に美に関する「危機」も肌身で知らされた。美は高野山では、信仰・宗教というものから構築されているのはもちろんだが、住民がいなければ維持できない。

しかし高野山でも、少子高齢化で市民不在状態になるという事態が現実化しつつあった。そこで高野山からユネスコで活躍されていた東大西村教授に呼びかけ、市民による「私たちの世界遺産」を立ち上げた。高野山での第 1 回目大会にはかのアレックス・カー氏も来てくれて大いに盛り上がった。そして途中から、皆さんもご存知のユネスコ事務局長の松浦氏、文化功労者の岩槻教授も加わって下さり、「違い文化を創る会」（代表松浦晃一郎）を立ち上げた。これが私とユネスコ世界遺産との関わりの歴史である。



ユネスコの誕生は戦争と深い関係がある。周知のように 2 つの大戦の反省から国際連合とユネスコが生まれた。ユネスコは多彩な活動を行っているが、そのなかで最も知られているのが世界遺産。これが現在かつてない危機に晒されている。その第一は、政治の介入である。「ユネスコは政治的に偏向している」と主張する米国の脱退により巨額の分担金が支払われず、ユネスコの財源は大ピンチ。また記憶遺産については慰安婦問題、南京事件という政治的問題が緊張を招いた。この問題の解決に対して日本政府は不満を表明してアメリカに引き続き、日本も分担金を支払わないというような脅しをかけた。さらに韓国・徴用工問題も控えている。すでに世界遺産に登録された富士山についても、そこに平和と正反対の位置にある自衛隊演習場が存在するのは、いかがなものかという疑問も提出されている。そこで「世界遺産と平和」の問題をもう少し深く掘り下げたいと思い、今日は共同執筆者として後でスピーチしてもらう佐藤弘弥君と、平泉、鎌倉、お遍路について考察した「世界遺産 ユネスコ精神 平泉・鎌倉・四国遍路」（公人の友社）という本をまとめた。中でも特筆すべきは、平泉の「供養願文」であり、これはユネスコ憲章の精神と見事に合致する。鎌倉は残念ながら世界遺産に登録されなかったが、「武家の都」とのプレ

ゼンがまずかったのかもしれない。源頼朝は平泉の供養願文を継承して「平和の都」を構想していた、という部分をもっと強調したらどうだろうか。四国のお遍路さんの「お接待」は、世界にも例を見ない風習であり、これは、宗教（お大師様）は、誰に対しても平等であり、差別がないということを庶民レベルで受け継いでいる、非常に独特な日本の文化であると考えなければならない。

他の問題として「観光災害」「開発」を考えなければならない。例えば西表島の住民4割が世界遺産になると観光客が増え「平穏な日常が乱される」と世界遺産登録に反対。京都の下賀茂神社のバッファゾーンの一部に「マンションを建てる」という問題は、世界遺産を傷つけるという意味では好ましいことではないが、しかしそれは「遷宮という儀式」の資金確保のため、と言われるように単に「保存しろ」と主張するだけでは解決できない問題を抱えている。こうした問題については今後、観光料など参拝者の「受益者負担」なども考える必要がある。

さらに世界遺産の対象物件がだんだんに少なくなっている、というような問題もある。普遍的価値がある、公開出来る、本物で完全なものである、などの世界遺産の登録条件を満たし、かつインパクトのある平和と直結する、対象物件は日本だけでなく、世界的にも先細りになっているのではないか？

しかし私は平和は永遠のものでなければならず、その課題もしたがって永遠なものだと考えている。ぜひ皆さんにも世界遺産を平和と結びつけて考え、かつ普及していただけるようお願いしたいと思います。

**東郷和彦氏：**建築基準法の「建築自由」に問題があると20代で看破された五十嵐先生はすごいと思う。戦後日本は「衣食住」のうち、「衣食」は一流に発展してきたが、「住」がどうしても貧しい。私は静岡県の対外関係補佐官を2011年から務めている。静岡県の川勝知事から声が掛かったとき、何故私が選ばれたのか分からず、川勝知事の著作を読み、「富国有徳」という概念を提唱されていることを知った。本当の豊かさを考えるとき、「住」が出てくる。私はこの豊かな「住」を「文化的景観」と呼んでいいのではと思う。「自然」「伝統と文化」を一緒にした調和ある住空間を作れないか？これを作るのは結局人間なので、人間の心に豊かさ、思いやり、皆で一緒に作っていくという精神があって初めて「富国有徳」が実現される。この知事の考えが素晴らしいと思い、ともに仕事がしたいと馳せ参じて今日に至っている。



静岡県には二つの世界遺産（富士山と韮山の反射炉）がある。川勝知事はさらに、県内の世界クラスの資源・人材群リストを作り、現在73個がリストアップされている。今日お話ししたい三島は、世界水遺産、世界灌漑施設遺産とされている。三島を視察して驚いた。美しい水を湛える源兵衛川の両岸に樹木が並ぶ。私は外務省時代にヨーロッパ暮しが長く、オランダやベニスが如何に水を都市景観に取り入れているかを見てきた。ここは東洋のベニス、東洋のアムステルダムになるな、と思った。ところが一昨年あたりから異変が起きた。市長が「三島駅の南口スペースに高さ100メートルの高層マンションを建てる」プロジェクトを進めている。これに反対する市民グループを私もサポートしているが、行政による不十分な情報開示などもあり、見通しは不透明である。日本の文化的景観を守りながら、街づくりを進めるにはどうするのがよいか？皆さんの知恵を借りたい。

**佐藤弘弥氏**：昨年韓国を訪れて面白い経験をした。日本を発つときは「戦争がいつ始まってもおかしくない」と感じていたが、韓国の人たちにはそのような危機意識は全くなかったため、「戦争は人の心の中から始まる」というユネスコ憲章を思い起こした。

第一次大戦では 2,600 万人、第二次大戦では 5,355 万人の犠牲者が出たと言われる。「ひとはなぜ戦争をするのか」（講談社学術文庫）によると、天才的物理学者アインシュタインは心理学者フロイトに公開質問状を出した：「人間を戦争と言うくびきから解き放つことはできるのか？」（P16）結果として戦争を避けることは出来なかったわけだが、フロイトは「文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩みだすことが出来る」（P55）と答えた。前述の本を詳しく読んで頂きたい。第一次大戦によって PTSD 患者が増加したことにより、精神医学が大きく発達した。私は若い頃から「人類は何故ナチズムの台頭を許したのか？」との疑問を持っていた。とりあえず一番納得のいく答えを与えてくれたのがスイスの心理学者カール・G ユングのナチズム台頭への見解：「すでに 1918 年にドイツ人の患者の無意識のなかに、彼らの個人的心理とは違う独特の障害があることに気づいていた。」（C.G. ユング「現在と未来」P116）



世界遺産は美しいものを残すだけでなく、負の遺産も残す。カンボジアの虐殺のあった場所、原爆が初めて落とされた広島、もちろんアウシュビッツもそうだが、人類が惨禍を忘れないためのものだ。

五十嵐先生と共に 20 年近く平泉に関わる中で、戦争がいかに人の心をつぶし、文化をつぶすかを見てきた。それでも平泉は一度も滅びなかった。カンボジアのアンコールワット、インドネシアのボロブドゥール、ミャンマーのバガンはどれも東南アジアの遺跡だが、一度滅びて後の世に発見されたもの。だからドナルド・キーンは「平泉は一度も死ななかった」と言っている。これが日本文化の特徴だと思う。当時の平泉は人口 5 万～10 万を擁する、京都に次ぐ日本第 2 の都市だった。源頼朝により滅ぼされなかったのは、宗教が機能していた故である。この精神は鎌倉に受け継がれ、さらに四国遍路のお接待文化にも息づく。世界遺産の精神を検証しながら、四国遍路を是非世界遺産に登録して頂きたいと願う。

## パネリストとの議論

**永野**：世界遺産というどうしても観光と結び付けがちだが、ユネスコ精神との関係でどう考えたら良いか？

**五十嵐**：従来の世界遺産についての「普遍的な価値」の説明はちょっと、珍しいもの、貴重なものというような感じで、それが日常的に平和の問題とがかわりがあるのだという説明は少し弱かったかもしれない。子供にも分かるようなやり方で世界遺産と平和との関係を説くよう工夫したい。

**永野**：東郷さんは三島の話がされたが、以前関わっておられた泉岳寺の話ともからめてコメントを。

**東郷**：2015 年、泉岳寺の隣に 8 階建てのアパートを建てる計画が持ち上がり、調和的雰囲気が壊されると懸念して半年間ほど反対運動した。現在、もうアパートは建っている。東京都は品川駅・高輪口からの一帯の再開発を進めている。ディベロッパーが長期的視野や自然・文化の美を考えるセンスを持って調和ある景観を作ってくれることを願う。

**五十嵐**：泉岳寺は忠臣蔵で有名、この物語は武士道の象徴である。武士道を世界に紹介したのが新渡戸稲造博士であり、博士は国際連盟事務次長としてユネスコの創建と世界平和に貢献した。西欧では「道」は単なる交通だが、日本では単なる道プラス「武士道」「茶道」「武道」など精神を表している。この新渡戸博士の業績は世界遺産の領域でももっとも高く評価されてよいのではないか。

**永野**：佐藤さんはユングのナチズム台頭への見解を紹介されたが、その「独特の障害」は当時のみ存在したのか、それとも今でもあるのか？

**佐藤**：ユングは「集合的無意識」と呼ぶ。現在の日本においてもこの種の無意識はあると思う。過去に引き起こした惨禍を忘れず、常に危機感を持つ必要がある。

## フロアとの質疑応答

**Q**：リニア建設のためにある地域の地下水脈が枯渇したとのニュースを聞いた。開発の負の側面を認識し明文化して教訓とすることは可能か？

**A**：東日本大震災で被害を受けた海岸線に高い防波堤を建設しているが、地下水の海への還流を妨げる可能性がある。「山は海の恋人」という知見が生かされていない。三島でも、富士山から流れる地下水を高層ビルの深い基礎工事部分が遮るのでは、という議論があるが、建設に歯止めがかからない。



**Q**：人間の住む街は樹木で隠れる程度の高さでなければならない、低層高密度の住宅にすべきという提言もある。そのあたりの議論を踏まえてもう一度三島を考えてもらいたい。

**A**：泉岳寺の話とからめて報告しますと、品川駅から泉岳寺周辺における地域の再開発については、高層ビルを一か所に集めて低層ビルのみの地区を創出する都市計画が、決定の手前まで来ている。

**Q**：先ほどから美という言葉が出ているが、古代の人が感じた美と、現代人の思う美は同じか？

**A**：学生に同じ質問をすると、9割が違うだろうという意見だ。しかし世界遺産の現地に連れて行き、実物を見た後では、ほとんどの学生が意見を変える。世界遺産の圧倒的な美と感動は地域と時代を超える。

最後に五十嵐氏が、会場にいらしていた四国遍路の住職の奥さまを紹介されました。「足摺岬から来ました。四国お遍路でお会いしましょう」とのご挨拶を頂き、シンポジウムは幕を閉じました。

(港ユネスコ協会 副会長 宮下ゆかり)

## 松本 洋さんを囲んでの M U A サ ロ ン

日時：2018年5月17日（木）午後6時～

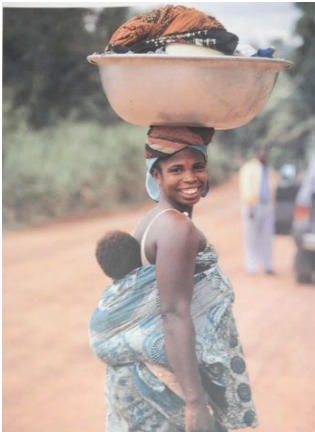
場所：港区立生涯学習センター内 MUA 事務局

港ユネスコ協会の国際・学術・文化など多方面の講演会・ディプロマツツレクチャーの企画は、相談役を務める松本洋さんの幅広いご人脈からの講師招聘を抜きにしては語れません。松本さんは、早稲田大学卒業後、英国のマンチェスター大学で都市計画を学び、日本道路公団、アジア開発銀行への出向。帰国後、国際開発センターで研究員、国際開発推進協会の常務・専務理事を歴任、政府の開発援助の推進に一役を担う。後「国際文化会館」へ。専務理事から今日「Inn Keeper」の要職で館を守られています。著書は「地球建築士：国際交流・協力の五十年」（柏艚舎）、「半地球 松本洋写真帖」（河出書房新社）。



60 か国にのぼる国々での人とののかかわり、そして「Public Mind（おおやけ《公》心）、Produce Mind（つくり《創》心） and Play Mind（あそび《遊》心）の3つの“P”“マインドで語って頂き、松本さんの原点はここにありが伝わってきた楽しい2時間でした。（右の写真は国際文化会館における事前打合せ）

今回は氏のヒューマンな視線から見た「新興国」をテーマとする写真集「半地球 松本洋写真帖」から100枚ほどをピックアップして頂いた。スクリーンに映し出される人物、自然、そして自然と人工物の対比など、一枚一枚の映像から「何を見たか、感じたか・・・」の撮影時の感動が再現され、真に迫るお話を頂きました。ほんの一部ですが、ここにそれらの写真をご紹介します。（常任理事 小林敬幸）



村にて（1986 象牙海岸）



いろいろなルーツの小学生（1985 西サモア）



渡し船の老人（1977 スーダン）



サロンのあと皆さんで記念写真

# ～「ミンダナオ子ども図書館」から平和を作る～

## フィリピン ミンダナオから来た 11 名の青年たちの 歌と踊りの公演

日時：2018 年 6 月 1 日（金） 13 時 30 分～16 時 30 分

会場：港区立生涯学習センター3 階 305 号室

### 内容

- ①「ミンダナオ子ども図書館」について：松居館長夫妻
- ②民族舞踊と歌：「ミンダナオ子ども図書館」の奨学生とスタッフ
- ③交流：青年たち全員のスピーチ「私の家族、将来の生き方」



来日したミンダナオの青年 11 名は、「ミンダナオ子ども図書館」の奨学金を受けて勉学を続けている高校生 5 名、大学生 4 名、そしてスタッフ 2 名です。2 か月の高校・大学の休暇を利用して、4 月 10 日から 6 月 10 日まで、日本各地（13 都府県）の小学校・中学校・高校、大学、地域団体や組織など、50 か所を訪れ、ミンダナオの民族舞踊や歌を披露しながら、青少年から中年にわたる大勢の人びとと交流を続けてこられました。

港ユネスコ協会では、会員のみでなく一般の方がたにも参加を呼びかけ、交流を楽しんでいただきました。

彼らの歌と踊りのパフォーマンスは、日本公演に向けて懸命に練習を重ねてきたことを証明するように、まるでプロのダンスグループと合唱団といってもよいような、見ごたえ十分の、魅力的なものでした。

今回の会場は、区立小学校跡の 2 部屋続きの教室なので、参加者の目前で繰り上げられる迫力はものすごく、若い熱気に圧倒されながら、会場全体が一体になって楽しみました。



交流の時間には、青年一人一人が自分のこと、家族のことなどを話し、口々に、この奨学金によって学ぶ機会を与えられたことへの感謝、学ぶことにより生まれた将来の計画や夢などを、公用語の英語あるいはフィリピン語で、心から湧き出でるような様子で、熱く話されました。（フィリピン語は館長夫人エープリルリンさんが英訳して下さいました。）

さすがに、選ばれた青年たちだけあって、自分の考えをしっかりと持ち、地に足がついた人生設計を持っておられるなと感心して聞いていました。全員が恵まれていない家族環境にめげず、というか、それをバネにして、力強く生きている姿は頼もしいかぎり。子どもたちや青年たちに教育の機会、つまり希望を与えているミンダナオ子ども図書館。松居館長夫妻、日本人やフィリピン人のスタッフの活動は素晴らしいとあらためて感じた次第です。



### 港ユネスコ協会との関係

13 年前から「ミンダナオ子ども図書館」とお付き合いを続けています。きっかけになったのは、2005 年 10 月の定例の講演会。松居友館長に「テロと戦闘の続くミンダナオでの医療、図書館活動」というテーマで講演していただいたことです。

初めて知るミンダナオの山岳地帯の紛争地域、貧困地域の状況は、ショッキングでした。その講演の後、ささやかながら、会員から寄贈された衣料品などを協会が集め、まとめて送り続けてきました。また、数名の会員は個人的に資金援助を続けたりしています。それが、今回の公演に結びつきました。



## ミンダナオ子ども図書館とは

16 年前に松居友館長によって、ミンダナオ島の中央に位置するキダパワン市の郊外の、フィリピンの最高峰アポ山麓の農地に立ち上げられた現地法人。(正式名称は、Mindanao Children's Library Foundation, Inc.)

主な活動： ①本館における読み聞かせなどの子ども図書館活動

②先住民族やイスラム教徒、難民の子どもたちなどが住む貧困や政治的困窮地域での読み聞かせ活動

③奨学生支援（小学生、中高生、大学生）。採用の基準は、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄妹が多く学校にいけない子とする。大学まで。特に何らかの事情で保護を必要としている子は、本部や下宿に住み、生活を保障している。(現在、約 200 名います。)

④医療支援、⑤保育所建設支援、⑥植林環境支援 など。



これらの活動の中心となって動いているのは、奨学金を受けている学生たち。ここでは、先住民族、イスラム教徒、移民系クリスチャンの子どもたちや青年たちが、宗教や部族の違いを越えて、一つの大きな家族として、共同生活をしながら、学び、そして活動しています。**これらの活動は、日本からの大勢の支援者の寄付によって可能になっています。**

## ミンダナオ島とは



フィリピン諸島は、ルソン島周辺の群島、ヴィサヤ諸島、ミンダナオ島周辺の群島という 3 つの大きな群島で構成されている。



国土の南 3 分の 1 の部分にあたるのがミンダナオ島周辺の群島。東海岸、西海岸および中北部には 2000m 級の山脈があり、フィリピン最高峰の火山アポ山 (2954m) が中央ミンダナオ高地にそびえている。フィリピン共和国は ASEAN 唯一のキリスト教国で、イスラム教徒は全国では 5% である。しかし、ミンダナオ島はイスラム教徒が人口の 2 割以上を占めている。

**フィリピン** 14-15 世紀にイスラム教が伝わり、ミンダナオにイスラム王国が誕生。1521 年マゼラン率いるスペイン艦隊がフィリピンに到着、1571 年からスペインの統治が開始。1898 年、米西戦争の後、米国の統治が開始。1942 年、日本軍政開始。1946 年 7 月 4 日フィリピン共和国が誕生。2016 年 5 月、ミンダナオ出身のロドリゴ・ドゥテルテが大統領に就任。



高校生のハニーさん  
支援者と対面

最後に、参加してくれた友人から翌日届いたメールを紹介させていただき、私のコメントといたします。

「お誘いくださって有難う。期待していた以上に楽しかったです。今まで何も知らず、あまり関心も持っていなかった地域の若い人たちですが、日本の同じ年齢層の人たちとは全く違った経験を持ち、全く違った生活をしているからか、ずっと年上のように思えたりしました。それにしても踊りや歌の素敵だったこと。わざわざ見せるために創ったのではなく、生活の中にすっかり溶け込んでいるのを実感しました。

寄付用の振込用紙をいただきましたので、少しですが私も協力させていただこうと思っています。」

(相談役・理事 高井光子)

## ゆかた着付け体験教室

日時:2018年6月16日(土) 13:30~16:00

会場:港区立生涯学習センター203号和室

日本の夏の定番「浴衣」。近年は、夏のオシャレ着として若い人たちの間で人気が高まっています。「自分で着付けした浴衣を着て、盆踊りや花火大会にお出かけしましょう。夏の思い出に、日本の思い出に」との呼びかけに、以下の36名のかたが参加して下さいました。

外国人:18名 (アゼルバイジャン・インドネシア・カザフスタン・キリギス・タイ・チリ・フィリピン・ベトナム・ミャンマー) :日本人:8名 (港区在住・在勤) :慶応大学ユネスコクラブ:3名 :アシスタント:7名。これに協会スタッフ:3名が加わり、総勢39名の集まりとなりました。

### ★企画内容

- 1) ゆかたの歴史の説明
- 2) 講師による着付けデモンストレーション
- 3) ゆかたの着付けを二回練習する。帯→女性:文庫結び:男性→貝の口の結び
- 4) 自分で着付けしたゆかたを着て記念写真
- 5) 脱いだゆかたをたたむ練習



### ★参加者の感想

(外国人)

☆素晴らしい経験をありがとう。今日はとても楽しめました。もう一回ゆかたを着てみたい。

☆全て完璧でした。外を歩けたらなお良し。

☆講義はすごく良かった。浴衣の歴史を理解することができた。浴衣着付けの体験は、私にとって新しい経験となった。

☆楽しくて堅苦しくなかった。

☆講義は情報たっぷり、スタッフはよく着付けを手伝ってくれました。

☆講義はとても分かりやすかった。英語の通訳があり、どうやって着るか分かりやすかった。

(日本人)

☆キチンと着れて気持ち良かった。

☆学校で学ぶべき技術だと思います。

☆着るだけでなく、歴史も知れて良かった。

☆サイズが大きすぎた時の直し方も教えてもらいました。一人で着れて、とてもうれしかったです。

☆「2回着てみる」というのはとても良い試みだと思いました。スタッフの方も多くて助けていただきました。

☆背筋が伸びて、日本女性になった気がします。英語の勉強にもなりました。

☆とても楽しくて、本当に勉強になりました。とてもみんなが楽しそうで、笑顔一杯の楽しい時間でした。

☆もっと難しいかと思ったけれど、教わってみると意外と自分でも着れるものだった。

なお、当日は慶応大学ユネスコクラブの方々が、受付のお手伝いをして下さいました。そのうちのひとり庄司瑞穂さんの感想：

「浴衣着付けを体験してみて、浴衣の歴史、日本独自の文化に触れることができましたと思います。多くの外国の方々がとても楽しそうに浴衣を着ているのが印象的でした。私個人としても正しい浴衣の着付けを学ぶことができ、とても貴重な体験となりました」



(左から：慶応大ユネスコクラブの内田さん、庄司さん、筒井さん)

★開催者側からひとこと：

皆様一生懸命に練習していただきました。最初は帯の巻き方に苦労されましたが、最後には綺麗に着れるようになりました。どなたも浴衣が似合っていました。これも、浴衣の魅力の一つかもしれません。浴衣の着付けを通して国際交流ができたことを嬉しく思います。

(副会長 平方一代)



## 「2018 年度 新入会員を囲む会」

- 活動内容の説明と懇親会 -

日時：2018 年 6 月 21 日（木）18：30～

場所：港区立生涯学習センター303 室および MUA 事務局

この一年間、英語教室、講演会、スピーチコンテストなどの活動を通じて MUA に多数の方にご入会頂きました。特筆すべきことは、慶応義塾大学の「慶応ユネスコクラブ（代表・筒井真子さん）」のメンバー 18 名が MUA 会員に協力団体会員として入会したこと。当日は、庄司瑞穂さん、上廣美佳さん、パン・ヒョンジョさんが慶応ユネスコから参加。そして井上順一さんとの 4 名の方々を囲んで会を開催。菊地賢介副会長の開会の言葉に始まり、この 5 月に入会し事務局長に就いた井上順一さんが挨拶され、前職の港区健康増進センター（ヘルシーナ）所長として港区民の健康増進を担ってこられたことを含め、今後の「ユネスコ活動」の抱負を語られた。

7 時近く、日吉キャンパスでの授業を終えた慶応の学生三人の到着を待って、永野博会長（右上の写真）の歓迎の言葉。「若い方たちの力」の活躍の場として「港ユネスコ」の場を有効に利用活用してもらい、お互いに共通の目的の「ユネスコ活動」につながるような場となるような協働をと、キックオフ宣言。次いで各委員会からその魅力、抱負、そして委員会活動の勧誘などをスライドを交えて説明、「オリエンテーション」を進めた。



- ◎ 会員開発委員会：秋山雅代常任理事
- ◎ 広報・インターネット委員会：棚橋征一常任理事
- ◎ 国際学術文化委員会：佐藤律子委員長
- ◎ 語学研修委員会：小林敬幸常任理事
- ◎ 世界の料理委員会：松崎加寿子委員
- ◎ みなと区民まつり委員会：北岡修委員長・磯部豊子常任理事
- ◎ 文化体験教室委員会：平方一代副会長（右下の写真）

休憩をはさんで、事務局内で懇親会を開催。新入会の皆さんの自己紹介を含め、大学での活動状況を聞きながら、両者の特徴を生かしながらの一段と広い視野での協会であり、クラブとなるよう誓い合った。



今年の活動は多彩なイベントを企画中ですが、第 2 回目の「日本語スピーチコンテスト」、各地の民謡と民話を紹介するシリーズの第 3 弾として「島根県」を取り上げるなど、各委員会でも時代に合った内容を準備しています。そんな中、若い学生の皆さんが MUA の仲間に加わったことで熱気があふれ、大変力強い思いを感じる一日となりました。



（会員開発委員会担当 常任理事 小林 敬幸）

## ルーマニア大使館訪問

日時：2018年6月28日（木）午後3時  
場所：港区西麻布3丁目

この2月に「ルーマニアの家庭料理」を開催、大変好評をいただきました。これはひとえにNPO日本ルーマニア音楽協会の理事長 嶋田和子様のご尽力によるもので、このご縁からこの度の「ルーマニア大使館訪問」を企画することができました。上記料理教室でご指導を頂いたルーマニア大使秘書・広報文化担当のシルヴィア・チェルケアザさんには本日も流暢な日本語でお国の説明をして頂きました。

西麻布の大使館を訪問したのはMUA会員12名。「ルーマニア」という国名はローマ帝国（ローマの言葉話す人）に由来していて、ダキア人とローマ人の混血。ラテン系の国民性、体操で有名なコマネチ、世界遺産が29にも及ぶ、ヨーロッパの心のふるさと・・・魅惑の国のお話の一端を下記のとおりまとめました：

- ★国土は本州と四国を合わせたくらいの大きさで東ヨーロッパに位置する。
- ★北大西洋条約機構（NATO）には2004年に参加。欧州連合（EU）には2007年に加盟。
- ★公用語は「ルーマニア語」。ロマンス言語でイタリア語、フランス語、スペイン語と似ている。
- ★国家記念日は12月1日：1918年のルーマニア統一を記念して制定。
- ★通貨単位は、レウ（単数形）（複数形はレイ）。通貨の国際記号は「RON」
- ★首都は「ブカレスト」
- ★歴史は、2千年前まで遡れる。ダキア人、ダキア国はローマ帝国と戦ったが、敗けてしまい「ローマ化」が進んだ。ルーマニア語の6割はラテン語由来。「ローマ人の国」と言われるゆえん。遊牧民族の時代から近隣国家との交流を経て・・・8～14世紀：小国時代、15～19世紀：三公国時代、1878年のルーマニア王国成立、1866年から第一次世界大戦まで「王家」が存在。1947年：一部がソビエト連邦へ割譲。1989年：チャウシェスク体制の崩壊（ルーマニア革命）により、共産主義国家から民主主義国家に移行。今日は半大統領制。国民の選挙で大統領そして国会議員を選ぶ。
- ★宗教は「ルーマニア正教」が86%、他にプロテスタント、ローマカトリック等。
- ★地形は、ドナウ・デルタ（ドナウ川の三角州）と黒海、カルパチア山脈とで豊かな自然の国を形造っている。ひとの手があまり入らなかったのが自然が多数残っている。
- ★食文化は、長年接触してきた異国の味覚文化からも影響を受け、独自の特色を持っている、オスマン料理の特徴があるが、ドイツ、セルビア、ブルガリア、ハンガリーなどの影響も受けている。主食は、小麦粉のパン。昔はとうもろこし。人気の食事は「サルマーレ（ロールキャベツ）」。
- ★伝統と風習 ◎3月1日の「マルツィショール」赤と白の糸で編んだ小物を男性から女性に尊敬の象徴としてプレゼント・・・街中が赤と白で染まる。◎3月8日の女性（母）の日。◎4月あるいは5月の「イースター」：ルーマニア正教ではクリスマスより重要。春分の日を過ぎた最初の満月の次の日曜日。◎お正月の山羊踊り。

この他、人気の観光地でもある「世界遺産」をスライドも含め多数紹介いただきました。近々ルーマニアを訪ねるという方の質問も含め、今後の友好につながる楽しいひと時となりました。最後に名残惜しく記念写真（中央がシルヴィアさん）。一時間半があつという間のルーマニア大使館訪問でした。



（会員開発委員会担当・常任理事 小林敬幸）

## 2018 年度 坐禅体験講座

日時：2018 年 6 月 25 日（月）18：30～20：30

場所：萬年山 青松寺（港区愛宕 2-4-7）

昨年度から取り組み始めた坐禅体験は、今回で 3 回目となる。青松寺の坐禅堂はリニューアル工事中のため、本堂に場を移しての坐禅体験となった。参加者数は 36 名であった。

始めに無関師から、パワーポイントを使って「座り方」のご説明があった。骨格の仕組みから説き起こし、「骨を意識する」のが重要とのお話。力まずリラックスした姿勢で座禅に入るよう導かれた。外国人参加者に配慮し、説明は日本語と英語で行われ、膝や腰が痛む方には椅子席が用意されている。立派な本堂での坐禅は、厳粛な雰囲気にも包まれてしばし静かに座ることが出来た。

体験の後はさらに講堂に移動し、無関師が「お経」の話をして下さった。「お経とは、インドのサンスクリット語で書かれたものを漢語に訳した、仏教の漢訳經典である。だから音だけ聞いても意味が分からない。」般若心経についても少し触れて下さったが、短い時間で到底理解できる内容ではないと感じた。青松寺様では座禅会の他にも写経や各種講座などの活動をなさっているので、関心のある方は是非そちらに参加して頂きたい。

今回の坐禅体験会にご協力下さった無関師始めお寺の皆様に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

（副会長 宮下ゆかり）



## 第74回日本ユネスコ運動全国大会 in 函館に参加して

### MUA 会長 永野 博

今年のユネスコ運動全国大会は7月7日、8日の両日、北海道函館市で「広げよう平和・共生の心～北の大地から次世代へ～」をテーマに、日本ユネスコ協会連盟、北海道ユネスコ連絡協議会、函館ユネスコ協会の主催で開催された。日本で広まる ESD 活動、世界で広まる SDG 活動を背景に、縄文人からアイヌ民族へとつながってきた「人間の大地」である北海道の歴史、江戸時代も外国との通商のあった箱館（当時の表記）の伝統、北海道・東北の縄文文化を背景とした世界遺産への申請の動き、くしくも北海道命名 150 年にあたる今年は、函館が全国大会の開催地となるには最も適したタイミングであった。



大橋洋治会長（左写真）、土谷二郎函館ユネスコ協会会長などの開会挨拶、工藤壽樹函館市長などの来賓挨拶で始まった全国大会は、北海道博物館館長石森秀三氏の基調講演「アイヌ文化に見る生命・環境・平和の潮流」で幕を開けた。講演では、縄文文化が1万年以上続いた理由をはじめとして、縄文文化の魅力を窺い知ることができた。続いて青年を主体に行われた函館野外劇と映像による構成劇「函館の未来とユネスコ」（下の左写真）は、もともとは夏に五稜郭で催される野外劇のいわば好いとこ取りをしたもので短時間のうちに江戸時代から今日に至る港町札幌の歴史的発展を堪能することができた。



初日の午後は、函館近辺の学校による ESD 活動報告があり、鉄道の敷設をはじめとする第二次世界大戦時の記憶を新たにする活動や、観光地としてその静けさと美しさで名高い大沼の環境汚染調査など、どれも関心を呼ぶ活動が紹介された。続いて行われた、未来遺産運動 10 周年記念フォーラム（上の右写真）では、北海道の未来遺産運動を紹介しつつ、世界遺産とは異なる理念にもとづくユネスコ協会連盟の未来遺産運動の紹介があった。記念物の維持、保存ではなく、有形、無形の地域の文化活動を元気づけ地域の活性化を狙う未来遺産運動は、まさに立派な運動であることを再認識した。

2 日目は「ESD と縄文文化」と題する前函館市縄文文化交流センター長阿部千春氏の講演で始まり、引き続きパネルディスカッションが行われた。阿部氏、函館アイヌ協会会長加藤敬人氏なども参加し、主題テーマである「広げよう平和・共生の心」を実現するための方策が、北海道ユネスコ連絡協議会会長大津和子氏のリードにより活発に議論された。

最後は、来年の全国大会開催地である東京からの出席者が壇上に上がり挨拶をして函館大会の幕を盛況のうちに閉じた。来年の全国大会は東京での開催となっており、港ユネスコ協会からも積極的な参画が求められますので、会員の皆様には積極的な参加をお願いいたします。

## 事務局便り

【ようこそ 新入会員】個人会員：小山 善之さん、富田 真子さん、平山 勝基さん

【今後の事業予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内します）

☆10月3日(水)～12月26日(水) 初級英会話講座、毎水曜日、18:30～20:30、コース全12回  
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター

☆10月3日(水)～12月12日(水) 初中級英語講座、毎水曜日、18:30～20:30、コース全10回  
講師：笠原三郎先生 会場：港区立生涯学習センター

☆9月4日(火) 港ユネスコ協会会報 和文153号、英文152号発行

☆9月8日(土) 10:00～11:30 外国人向け競技かるた体験講座

講師：東京都かるた協会講師及び有段者

会場：港区立生涯学習センター101号室

☆9月15日(土) 14:00～16:30 港区競技かるた交流大会 in 増上寺

講師：東京都かるた協会講師及び有段者

会場：増上寺

☆9月27日(木) 18:30～20:30 第一回国際理解講演会（スロヴェニア）

講師：城西大学 現代政策学部准教授 ボンティアン・ベルタラニチュ

会場：港区立生涯学習センター305号室

☆10月6日(土) 11:00～16:30、7日(日) 10:00～15:30 第37回みなと区民まつり

☆10月14日(日) 13:30～16:00 郷土文化紹介 第3回日本の民謡と民話／島根県

講師：安来節保存会踊り師範、島根県出雲民話の会会員

会場：港区立生涯学習センター101号室

☆10月19日(金) 11:00～20:00 第19回フェスティバルーン

☆10月22日(月) 第2回 茶の湯入門（3回コース）

11月26日(月) 講師：小野 宗恵（裏千家 専任講師）

12月25日(火) 港区立生涯学習センター203号室

### 【ご協力のお願い】

- ・日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金。常時受け付け中です（MUA事務局まで）。
- ・「ミンダナオ子ども図書館」に贈る衣類（子供用、大人用）、タオル、スニーカー、サンダル、食器、カバン類、絵本、医療品の寄付（新品、中古品いずれでも）を募っています。一次締め切りは10月15日、届け先はMUA事務局です。ご協力をお願い致します。

### 【編集後記】

- ・近頃、特にスポーツ界においてハラスメント問題が巷を賑わせている。今まで隠蔽されていたものが、内部からの声で、露呈されてきたように思える。スポーツの名のもとに、自浄作用が健全に機能することに期待する。（井上順一）
- ・かつてヨーロッパ大陸と英国が鉄道で結ばれたときには歓迎ムードであったが、英国もEU離脱を選択し、米大統領も関税を高め、自由貿易から遠ざかっている。国家間の障壁の高まりや対立の激化が懸念される。（前田幹博）
- ・今年の夏は本当に暑かった。30度が涼しい？沖縄に避暑？日本だけでなく世界中で異常気象が起きている。当たり前だと思っていた日本の四季がなくなりつつある昨今、地球温暖化を止める方法はないのだろうか。（小林真弓）
- ・7月下旬から2週間、米国の姉妹都市でホームステイしてきた高校生グループが元気に帰国した。体験報告会で「自分の人生にとって宝となる異文化経験でした」と語る若者たち。有意義な気づきに満ちた機会となったようだ。（棚橋征一）

---

港ユネスコ協会事務局 （火～金 10:30～17:00）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：[info@minatounesco.jp](mailto:info@minatounesco.jp)

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

---